

シネマ探訪

「植木等と昭和の時代」展、感想

田中 忍 三重映画フェス会長

三重県総合博物館の展覧会場に入ると、植木等の肉声が迎えてくれる。昭和58年7月に鎌倉円覚寺で行った講演会のテープが、同寺に残っており、その概要は次のとおりである。

「昭和36年、30代も半ば近くの俺に、『スーダラ節』という馬鹿げた歌を歌わされた。嫌で嫌で逃げまくっていたが、ヒットしたら自分の気持ちも変わり、一生懸命歌わないといけないと思ってきた。東宝のプロデューサーが、この歌を聞いて『あの変な歌を歌っている男を使って主演映画を撮ろう』という話になり、『日本一シリーズ』『無責任男シリーズ』に出た。TV『おとなの漫画』や『クレージー年忘れ爆笑公演』などの舞台にも出た。疲れ切りトイレへ行くのも這って行った程だ。歌も映画もヒットし有頂天になっていた昭和40年頃、父から『お前はいつごろになれば、本物になるんだ』と言われ、グサリと来た。言い換えればおまえがやっていることはニセモノだっていうことになる。悩んだ。よし、

日本の芸能史の1ページでも植木等の名が残るような芝居をしよう、そして業績を遺して死にたいと思うようになった」。

この講演は10分程に編集されているが、植木等を知るに相応しい内容で、是非、講演の冒頭から最後まで、来場者に聞いて欲しいと思った。

植木にとって父・徹誠（テツジョウ）の存在は大きい。大正デモクラシー真つ只中、10代の徹誠は工場で働きながら労働運動にも関わる。後、三重県大台町や伊勢市の住職を務めるが、部落解放運動や反戦を唱え投獄された事もある。しかし、植木は「父は間違っていない」という気持ちを持っていた。

折しも、前述の講演を行った昭和58年7月、植木は、『夢を食いつづけた男くおやじ徹誠一代記』（朝日新聞社）を発刊するため、40年ぶりに伊勢市を訪れ逗留している。

「父は息子に理解されたいと願ひ、息子は父を理解したいと望んでいる。だが、この二人がしんみりと人の世の万般について語りあうなどということはまず無い。（中略）おやじと語りあおうとするなら、息子はそれ相応の年齢を重ねなければならぬ。私もようやく、その年齢に達したようだ」と、

植木はまえがきで記している。植木等、56歳の年である。

さて、植木は、酒も飲まない非常にまじめな性格の男である。仕事のためにコミカルソングを歌い、無責任男を演じたが、世間も自身もそのイメージを拭い去るのにかなりの時間がかかった。展覧会の年表を見ると、昭和46年12月、映画「日本一シリーズ」が終了する。昭和47年10月、TV「シャボン玉ホリデー」終了後、昭和52年まで特記事項が無い。この間、植木の中でどのような葛藤があったかはわからないが、植木は、「普通の人間を演じたく、普通の役柄ならどんな仕事でもした」と語っている。

昭和52年9月、植木は東宝の舞台「王将」で坂田三吉を演じたことが芸能人生の転機となる。以降、映画「ただいま誕生」（展示期間中、1月22日、3月18日上映）、「逆噴射家族」「乱」「新・喜びも悲しみも幾歳月」「あした」等に出演し、文字通り、『植木等の名が残るような芝居、業績』を遺した。

展示物に目をやると、植木が出演した映画のポスターや台本、写真、衣裳をはじめレコード、植木愛用のギターなどが展示されている。これに加え、植木と交流のあった人物、小松政夫（展示期間中、2月5日、3月4日トークショー）、

所シヨージ、大林宣彦、大地真央らが植木の思い出を語るコーナーに映像で登場されたり、植木を尊敬する人々、星野源、藤元康史（最後の弟子）らのメッセージが掲示されている。皆、「植木等さんの展覧会なら喜んで」と協力いただいたと担当学芸員のUさんは語る。この展覧会は、単なる植木の業績を並べているだけでない。展覧会のタイトルが示しているように、昭和、特にこの時代を代表とするブラウン管テレビの変遷が植木の人生とだぶってくる。

植木の誕生日1926（昭和元）年12月25日は、NHKが、世界で初めてブラウン管にカタカナの「イ」の字を映し出した日である。昭和30年代はテレビが普及し、植木らの人気も昭和40年代に向けてうなぎ上り。人気のピークが過ぎ、植木は昭和52年、芸能人生の転機を迎える。植木が亡くなった平成19（2007）年は、昭和を代表とするブラウン管の生産中止を決めており、昭和はだんだんと遠くなくなっていった。

本展は、三重県総合博物館のオリジナル展である。本展を開催するにあたり、植木の遺族、植木が属していた渡辺プロダクション、そして最後の弟子である藤元康史氏の協力がなければ開催は出来なかったとUさんは語る。一年前、Uさん

に初めて会った際、映画をよくご覧になれる人物とは感じなかったが、今や、植木等研究者と呼んで相応しい知識・情報を持たれ、その研究心に脱帽する。

本展は三重県初めての芸能人の展覧会だと推測するし、植木等の回顧展は日本初である。展覧会は平成29年3月20日で終了するので、

本稿を読まれた頃は残念ながら本展はご覧にならない。ただ、図録が大変丁寧に製作され、900円とお値打ちなので在庫があれば、是非、買い求めてはどうだろう。本展が他県にも目が留まり、日本各地で巡回されることを望み、筆を置く。



映画『少林寺』の衝撃とジェットリーの現在

水野圭次郎 菰野ふるさと映画塾OB

「ハァー ハッ ハッ ハッ ハハ」少林寺の僧侶の繰り出す拳の勇ましさに当時、中学生だった私はすっかり魅了されてしまった。

それまでブルースリーやジャッキーチェンのカンフー映画を見ていたが、李連傑（ジェットリー）や中国大陸の武術チャンピオンたちが繰り出す見たこともない技の数々に驚きを隠せなかった。そしてその思いは強まるばかりで大学では中国武術同好会に所属し、三年の時には嵩山少林寺を一人で訪れ、映画『少林寺』のロケ地を巡った。

中国大陸では1966年から77年まで文化大革命の嵐が吹き荒れ、伝統文化や封建的な文化は否定され、知識人が文化人は迫害を受けた。嵩山少林寺でも多くの貴重な文物が破壊され、武術をすることは許されなかった。各地で伝統を守っていた高名な武術家たちも農民や町民に姿を変え、息を潜めていなければならなかった。その間、香港では多くのカンフー映画が作られたが、中国大陸では国威発揚のような映

画しか作られて来なかった。

文革終了後、中国政府は、方針転換を図り、武術を格闘技としてではなく、人民の健康を促進する体育競技として発展させ、中国が誇る優れた文化として世界に発信しようとする国家をあげて制作したのが、映画『少林寺』である。

主役に抜擢されたのは中国全国武術大会において5年連続で個人総合優勝を果たしたジェットリー19歳だった。彼は北京市内の貧しい家庭に育ち、武術選手として身を立て、家族を支えるためにスポーツエリートしか入れない北京業余体育学校に8歳で入学し厳しい練習を積んでいた。

この体育学校でドニーエン（『イップマン』主演、『ローグワン』の盲目の戦士）は後輩にあたる。ドニー在籍時には、すでにジェットは少林寺出演のため多忙で、ほとんど顔を合わせることはなかったが、後に『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・チャイナ』『HERO』で共演している。

ハリウッドに進出したジェットリーは、誰もが認める国際的アクションスターに成長したが、ここ数年出演作品を目にしていない。そんな時、レンタルビデオで主演作の『海洋天堂』を見つけた。その内容は、妻を失い自閉症の息子を一人で育てている男が、医師から余命宣告を受け、息子の生きて

いく場所を懸命に探すという文芸作品で、全くアクションシーンはない。作品自体はとても素晴らしかったがノーギャラでこの作品にジェットが主演したと聞き「なぜだろう？」と疑問を持った。中国の友人に「ジェットはどうしたの？アクションはやらないの？」と尋ねたところ、「彼は2013年から甲状腺亢進症という難病にかかり、運動ができない体になっっているんだよ。URLを教えるからこのサイトを見てみて」と言われ、そのサイトを見てみるとバセドー氏病のように眼球が飛び出し、体がむくんでいる変わり果てたジェットリーの姿があった。彼の病状は少しずつ回復しているようだが、往時のようなアクションを望むのは無理かもしれない。

補足になるが『少林寺三十六房』に主演し、『キルビル2』で白眉のカンフーの達人を演じたリユー・チャーフィーも脳梗塞の発作で階段から転落し車いす生活を余儀無くされている。

一時代を築いたアクションスターが自らの力を発揮できないでいる姿はとても痛々しい。どんな形でも良いので復活を遂げて欲しい。

がんばれ！ジェットリー、リユー・チャーフィー！